

# 直筆の絵手紙で見る 日本近代画壇の画家たち

長年にわたって、有名画家の直筆エンタエアを収集してきました。それらを見るたびに個性豊かなその人柄や人間性などが垣間見えるようです。今回はその中から画家が直接絵筆を執って絵を描いたり、手刷りの版画を施した実通葉書15通を、切手になった作品と共に展示します。葉書の面積は小さくても一流の画家たちは絵の具やインク、墨の濃淡、筆遣い、文字と文字のつながりに至るまで、独特の感性によって、宛名も含めて一つの作品に仕上げたように思えます。これらの葉書を通して一人一人の人柄や描いた時の心情、ひいては手紙文化の素晴らしさを感じていただければ幸いです。

## 展示プラン

リーフ No 2	菱田 春草	(1874~1911)
リーフ No 3	結城 素明	(1875~1957)
リーフ No 4	平福 百穂	(1877~1933)
リーフ No 5	南 薫造	(1883~1950)
リーフ No 6	橋口 五葉	(1881~1921)
リーフ No 7	福田 平八郎	(1892~1974)
リーフ No 8	竹内 栖鳳	(1864~1942)
リーフ No 9	堂本 印象	(1891~1975)
リーフ No 1 0	金島 桂華	(1892~1974)
リーフ No 1 1	藤田 嗣治	(1886~1968)
リーフ No 1 2	中村 岳陵	(1890~1969)
リーフ No 1 3	川端 龍子	(1885~1966)
リーフ No 1 4	堅山 南風	(1887~1980)
リーフ No 1 5	棟方 志功	(1903~1975)
リーフ No 1 6	前田 青邨	(1885~1977)

※使用されたエンタエアの日付が古い順に展示しています。

※絵入りの葉書裏面をそのまま展示し、宛名面はすべて90%に縮小コピーしています。

# 菱田春草 (1874~1911)



黒き猫図(1910年)



明治7年、長野飯田藩士の三男として誕生。15歳で上京し狩野派の結城素明に師事し、明治23年に東京美術学校に入学。岡倉天心校長の下、横山大観・下村観山の後輩として橋本雅邦の指導を受けた。明治28年卒業し、翌年、母校の講師になると共に日本絵画協会に加わり、絵画共進会に革新的な作品を次々と出品した。明治31年、日本画改革論者の岡倉天心が東京美術学校を去るに伴い、横山大観らと共に辞任して、日本美術院創設に参加。明治33年頃から斬新な没線描法を取り入れ、朦朧体と評された。同38年以降は琳派の手法も取り入れて文展で活躍。明治39年、日本美術院が茨城県五浦に移ると同時に移住して作品を描き続け、近代日本画の発展に尽くした。しかし、明治41年に腎臓病による網膜炎治療のために帰京。病状が悪化する中でも、文展に代表作「落葉」や「黒き猫」を出品し続けたが、明治44年に失明し38歳の若さで夭折した。

この葉書は明治39年、五浦に移住する直前に、故郷飯田に宛てて長野の松代より送った実郵便。裏面では墨の濃淡を活かした絶妙な筆致で、春草独自の世界が表現されている。



宛名面(縮小率90%)



明治39年(1939年)

11月22日

長野・松代

↓

長野・飯田

# 結城素明 (1875~1957)



明治8年、東京・本所区の酒屋の次男として生まれた。同24年、川端玉章の天真画塾に入り、翌年、東京美術学校日本画科に入学。卒業後には同西洋画科でも学んだ。文展には第1回展より出品して受賞を重ね、大正8年から審査員を務めた。その後は官展の保守的傾向に飽き足らず、同5年、鍋木清方らと金鈴社を結成し、自由で純粋な表現を追求した。当初は写生的な画風に西洋画を取り入れた日本画を描いたが、徐々に装飾的な画風に移り、後年は西洋的な写実に濃彩を施した独特の作風を築いた。代表作は「炭窯」「夏山三題」など。明治35年から母校の日本画科で後進を指導して、昭和20年には名誉教授となった。文筆にも優れ、「鑑賞日本絵画史」等多くの著作を遺した。

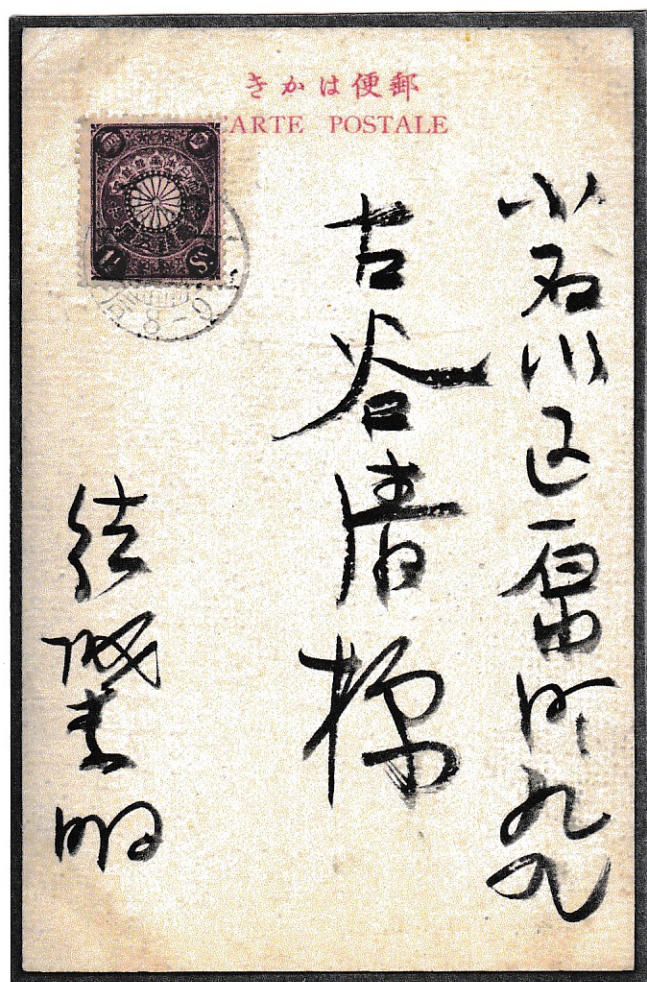


炭窯 (1934年)

この葉書は子年の明治45年元旦、交友があった軍人で、後に陸軍少将となった古谷清宛に差し出された手刷りの年賀状実郵便。

明治45年(1912年)1月1日 差出地不明 → 東京・小石川

宛名面 (縮小率90%)



# 平福百穂 (1877~1933)



秋田県角館の画家平福穂庵の四男として誕生。17歳で上京し、四条派の川端玉章に師事。明治33年、東京美術学校日本画科卒業の翌年に結城素明らと无声会を結成し、日本美術院のロマン主義的歴史画と対照的な自然主義的写生画を目指した。明治40年、国民新聞社に入社し挿絵を描きながら明治42年より文展や帝展に作品を発表。大正5年に鏑木清方らと金鈴社を結成後には中国の画像石や南画への関心を示す作品を発表。大正6年、「予穰」が特選となり、自然主義から琳派風の装飾的な構成への転換を示したが、晩年は南画の手法を加えて清らかな画風に到達した。昭和7年より東京美術学校教授を歴任。伊藤左千夫らと共にアララギ派の歌人としても活動して、歌集「寒竹」を発刊した。

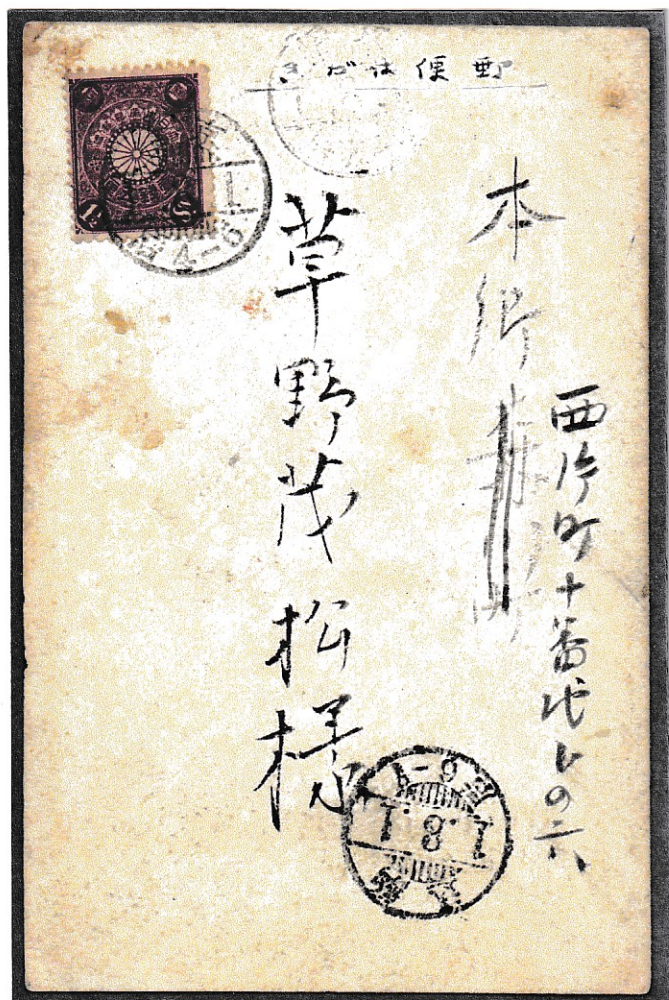


荒磯 (1926年)

この葉書は大正元年に、自らが勤務していた国民新聞社の参事・論説委員の草野茂松宛に差し出された直筆の水彩画実郵便。

大正元年(1912年)8月1日 東京・京橋 → 東京・駒込

宛名面 (縮小率90%)



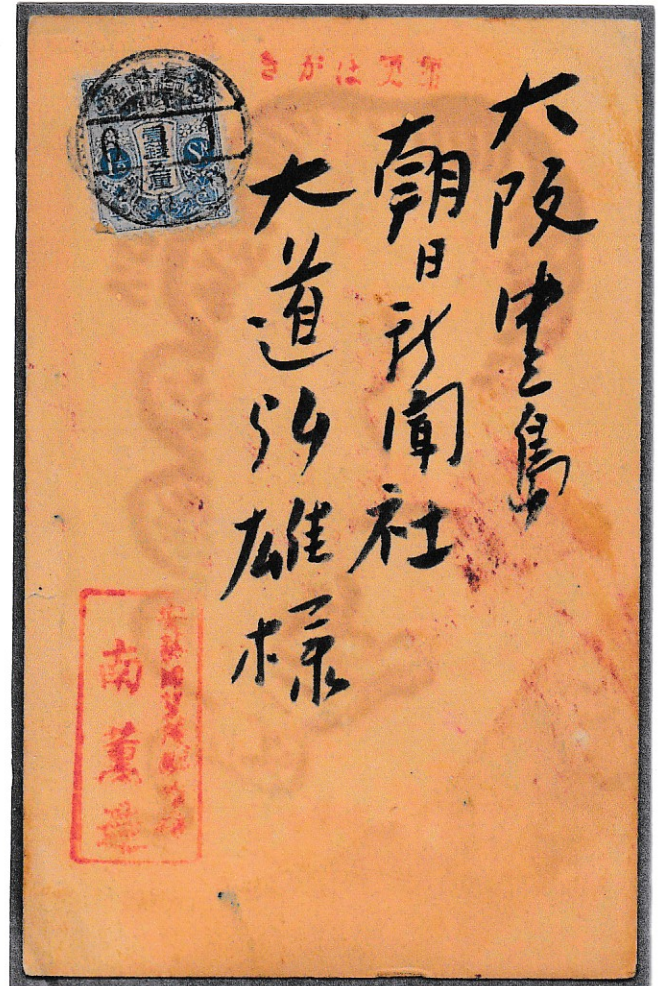
# 南 薫造 (1883~1950)



少女 (1909年)

明治16年、広島県賀茂郡で誕生。東京美術学校西洋画科で岡田三郎助に師事。明治40年~43年に英国に留学し、ボロー・ジョンソンに学んだ。その後、欧州各地と米国を訪れ、明治43年に帰国。文展・帝展・新文展・日展で活躍し、大正2年には日本水彩画会の創立に参加。大正5年より文展審査員などを歴任し、昭和7年から東京美術学校教授を務めた。油絵画家、水彩画家として有名だが、版画制作にも力を注いだ。その作風は高村光太郎が「大手を振った芸術ではなく、どこまでもつつましい、ゆかしい芸術である。」と言いつつ、風景や情景の中に人の存在を感じさせ、「人を見るやさしさ」に溢れた作品を描き続けた。戦時中、中国で戦争画家として従軍する苦悩を経て晩年は郷里の内海町で暮らしながら自らのライフワークとして瀬戸内海を描き広島の文化貢献に関わり続けた。広島県賀茂郡内海町(現呉市安浦町)には昭和60年に南薫三記念館が造られ、郷土の人々にその功績を伝えている。

この葉書は大正6年の元旦に、故郷の広島・内海町から大阪朝日新聞社の名物記者だった大道弘雄に宛てて差し立てた年賀状の実通便。渡欧していた時から憧れ、後に訪れたインドのヒンドゥー教ビシュヌ神が手刷りの版画で表現されている。



宛名面 (縮小率90%)



大正6年(1917年)

1月1日

広島・内海



大阪・中の島

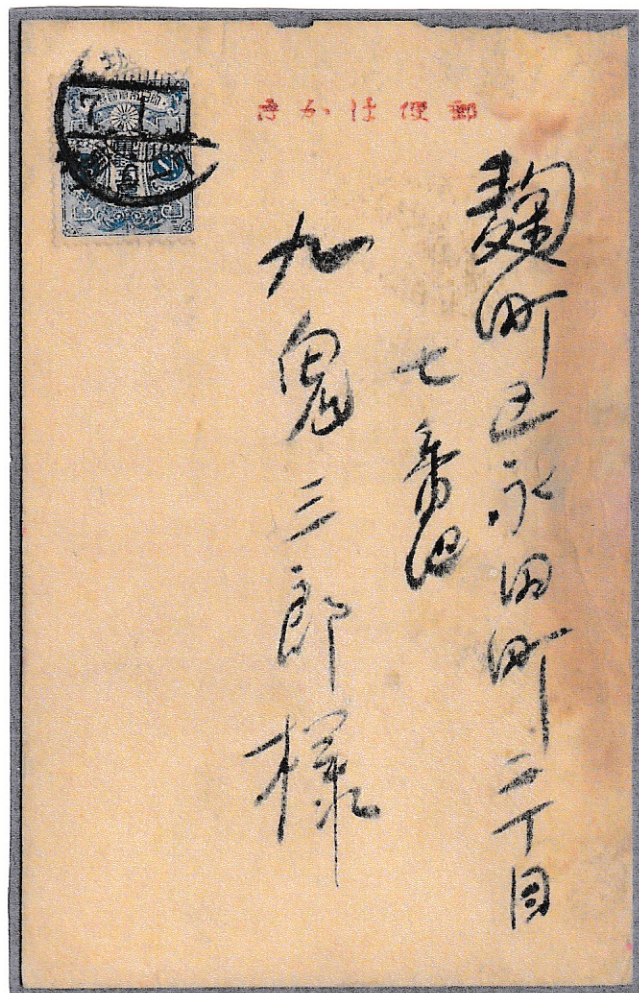
# 橋口五葉 (1881~1921)



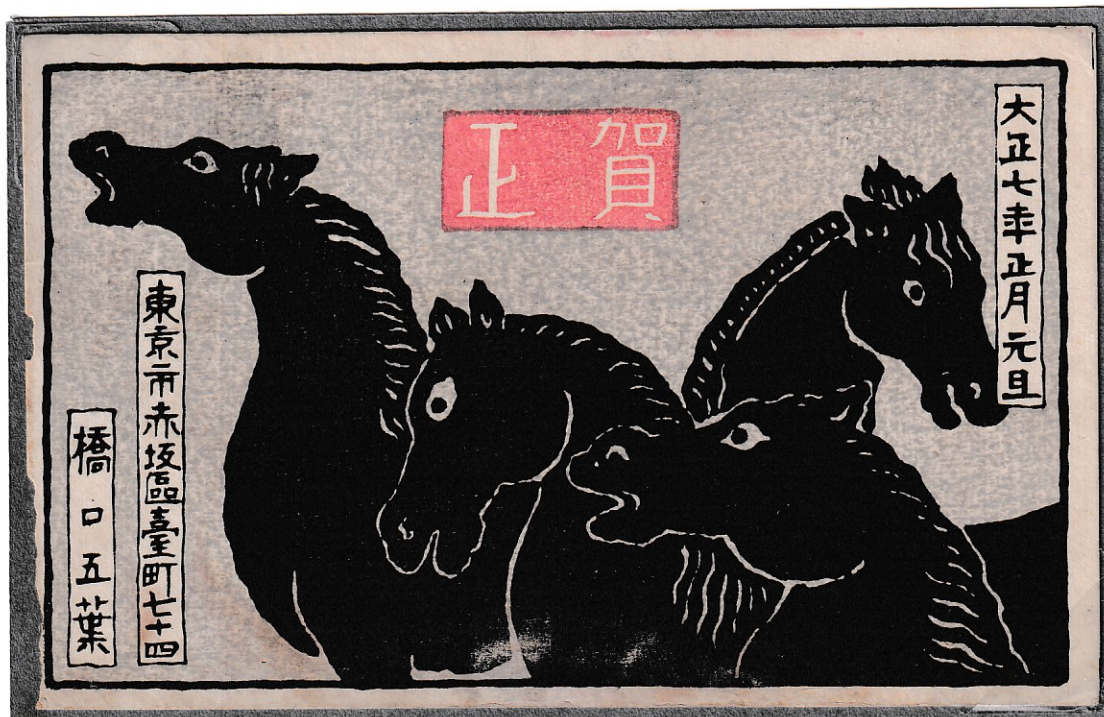
髪梳ける女(1920年) 化粧の女(1918年)

明治14年、薩摩藩の漢方医の三男として誕生。明治32年に画家を志して上京し、白馬会で橋本雅邦に師事した。遠縁の黒田清輝の勧めで翌年、東京美術学校西洋画科予備課程甲種に入学し、翌年本科に入学。明治38年、首席で卒業した。在学中に雑誌「ホトギス」の挿絵を描き始め同38年の「吾輩ハ猫デアル」から「行人」まで夏目漱石作品の装幀を手掛けた。他にも森鷗外、永井荷風らの装幀を手掛け、同40年には第1回文展で「羽衣」が入選。画家としても注目された。また、同44年には「此美人」が三越呉服店の懸賞広告図案で第一等を受賞。大正4年には渡辺庄三郎を版元とする新版画の運動に参加。浮世絵の研究を極めて、鈴木春信の美人画複製なども行った。一方で裸婦の素描を繰り返し、版画へ起こすべく、ただ一本の墨線に纏め上げて大正7年に私家版木版を完成。「髪梳ける女」「手鏡」などの代表作を描いた。これらは歌麿に学び、背景を雲母で塗りつぶす伝統技法を生かしつつ、肉体表現に新しい感覚を取り入れた。中でも「髪梳き」は油絵を基礎にして、木版に新ロマン派の要素も取り入れ、写実的な表現に昇華している。

この葉書は版画を極めていた大正7年元旦、洋画家の九鬼三郎宛に送った年賀状美郵便。干支の馬を独特の表現で刷り上げている。



宛名面(縮小率90%)



大正7年(1918年)

1月1日

東京・赤坂

↓

東京・麹町

# 福田平八郎 (1892~1974)



明治25年、大分市の文具商の長男に生まれた。円山四条派系の写生から出発し、京都絵画専門学校(現京都市立芸術大学)を卒業後、27才で帝展に出品した「雪」が入選したのを皮切りに、2年後には「鯉」が特選を受賞。初期の写実的、濃厚な質感表現から次第に単純化を強め、明快な色彩と大胆な画面構成で画壇の中心的存在となった。鋭い観察眼をもって植物や自然が持つ雰囲気や美を抽出した独特の表現で日本画の新境地を拓いた。40才で中村岳陵、牧野虎雄、山口蓬春らと六潮会を結成。その後も、芸術院会員、日展顧問として活躍し、昭和36年には文化勲章を受章した。



花菖蒲 (1957年)

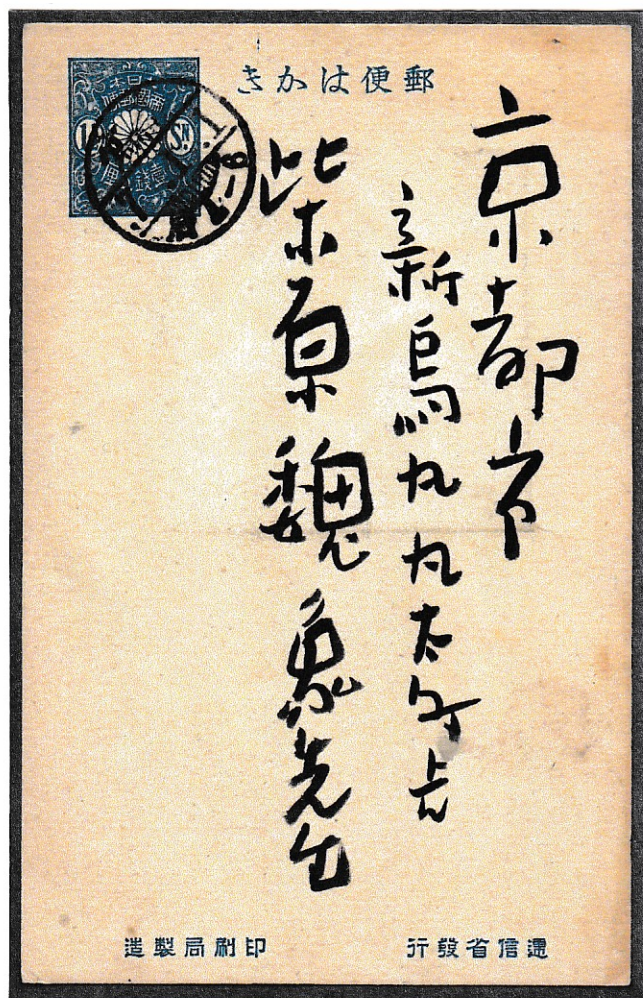


筍 (1947年)

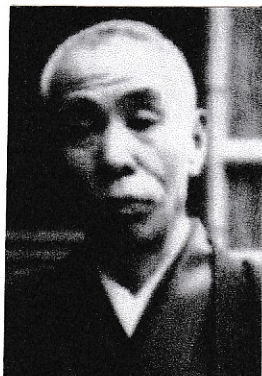
この葉書は大正7年の元旦に日本画家の柴原魏象宛に送られた手刷りの年賀状実郵便。丸みを帯びた筆文字が馬の版画と相まって美しく表現されている。

大正7年(1918年)1月1日 京都 → 京都

宛名面 (縮小率90%)



# 竹内栖鳳 (1864~1942)



元治元年、京都の料理屋の一人息子に生まれ、17歳で円山・四条派の幸野樸嶺に入門して、日本画を学ぶ。23歳で絵師として独立し、京都府画学校(現京都市立芸術大学)を修了。36歳でパリ万博への出品作「雪中燥雀」が銀牌を受賞。その視察をきっかけにして7カ月間、欧州を旅行し、ターナー、コローらの強い影響を受けた。その画風は四条派を基礎とし、狩野派や西洋の写実画法を意欲的に取り入れた革新的なもので、日本画革新運動の一翼を担った。明治40年の文展開設時より文展や帝展の審査員、帝室技芸員を務め、在野の横山大観と画壇の双璧をなして、「西の栖鳳、東の大観」と称された。画塾「竹杖会」を主宰して弟子の育成にも尽力し、上村松園、土田麦僊、西山翠嶂らを輩出。昭和12年には第1回の文化勲章を受章した。



斑猫 (1924年)

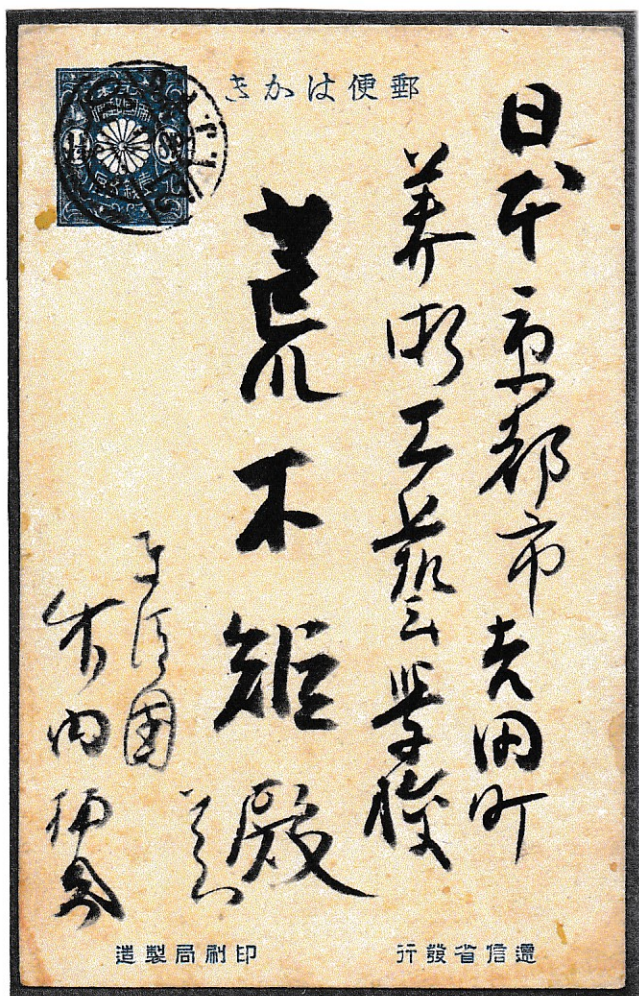


アレタ立に (1909年)

この葉書は大正10年、当時、日本の領土だった朝鮮を旅した際に京都市美術工藝画学校に勤めていた国文学・漢文学者の荒木矩(ただし)宛に書き送った絵手紙実郵便。上海の寺院がそびえる風景が軽快な筆使いで描かれている。

大正10年(1921年)1月20日 朝鮮・上海 → 日本・京都

宛名面 (縮小率90%)





# 堂本印象 (1891~1975)



明治24年に京都の酒造家の三男として誕生。京都市立美術工業学校を卒業した後、西陣織物工房に勤務。後に京都市立絵画専門学校に進み、在学中より西山翠嶂に日本画を学んだ。帝展の第1回展に「深草」を出品して入選したのを皮切りに、第6回展出品の「華嚴」が帝国美術院賞になるなどして、画壇に地位を築いた。大正13年より帝展審査員となり、京都市立絵画専門学校教授となった。仏画や寺院の襖絵を多く手掛け、戦後は日展を中心に活躍した。日本画における抽象表現を追求し、国際展に多くの作品を出品した。昭和36年、文化勲章を受章。同38年、ローマ法王からサン・シルベストロ騎士勲章、同49年、サン・シルベストロ十字勲章を受章した。

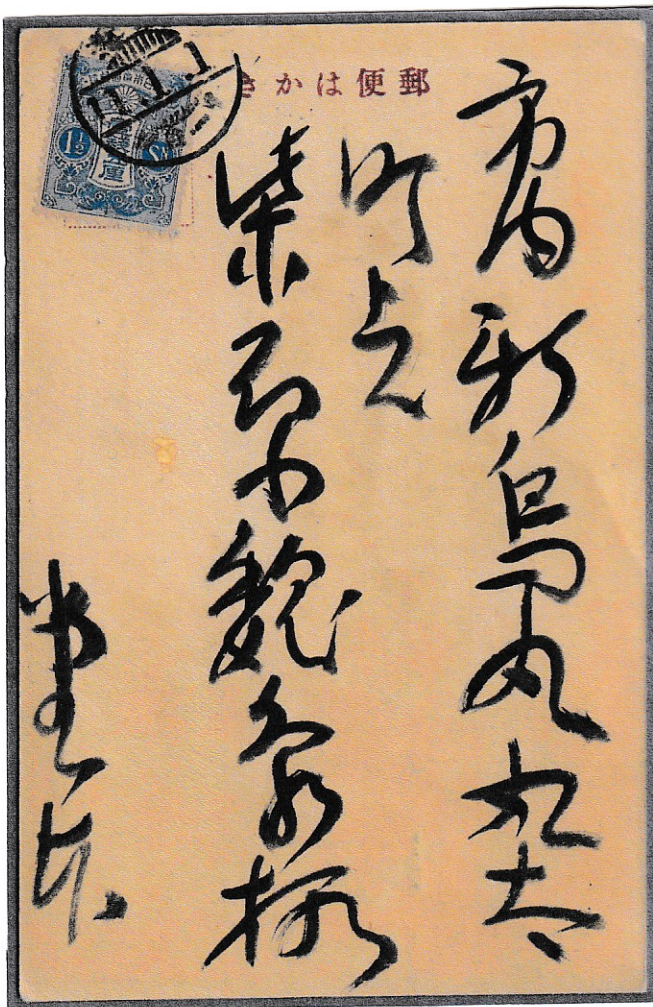


兎春野に遊ぶ (1938年)

この葉書は大正11年の元旦に日本画家の柴原魏象宛に差し出された版画の年賀状。新年にふさわしい吉祥柄でもある鯉の「滝登り」が版画と墨で見事に表現されている。

大正11年(1922年)1月1日 京都・五條 → 京都・烏丸

宛名面 (縮小率90%)



# 金島桂華 (1892~1974)



明治25年、広島県湯田村の生まれ。本名は政太。大阪で西家桂州、平井直水に師事した後に、19歳で京都の竹内栖鳳の門に入った。大正7年の文展に初めて入選し、同14年には「芥子」が帝展で特選、以後も官展に出品を続けて活躍した。昭和28年には代表作の「冬田」が芸術院賞を受賞。作品は花鳥画が多く、竹内栖鳳の影響を受けて、四条派の写生体を基本とした中での装飾性の強い表現が特徴である。昭和9年より帝展審査員を務め、昭和14年から京都市立美術工芸学校で教鞭をとるとともに画塾「衣笠会」を設立して、後進の指導にも尽力した。昭和34年に芸術院会員となり、同41年、勲三等瑞宝章、同44年には京都市文化功労賞を受賞した。

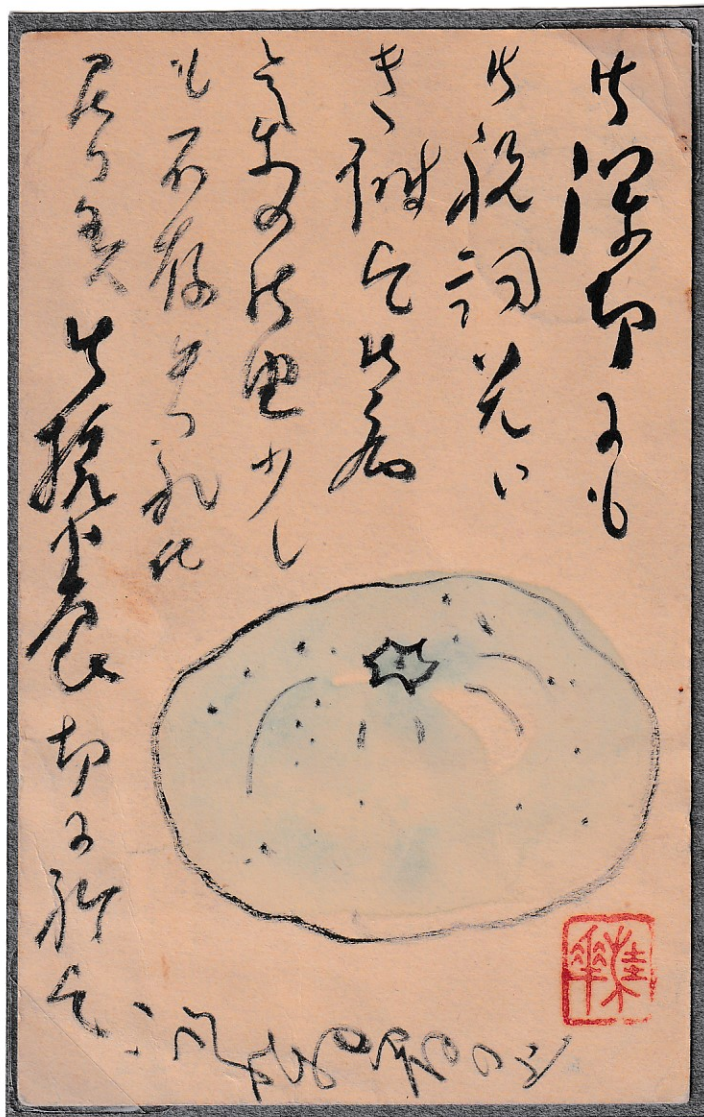
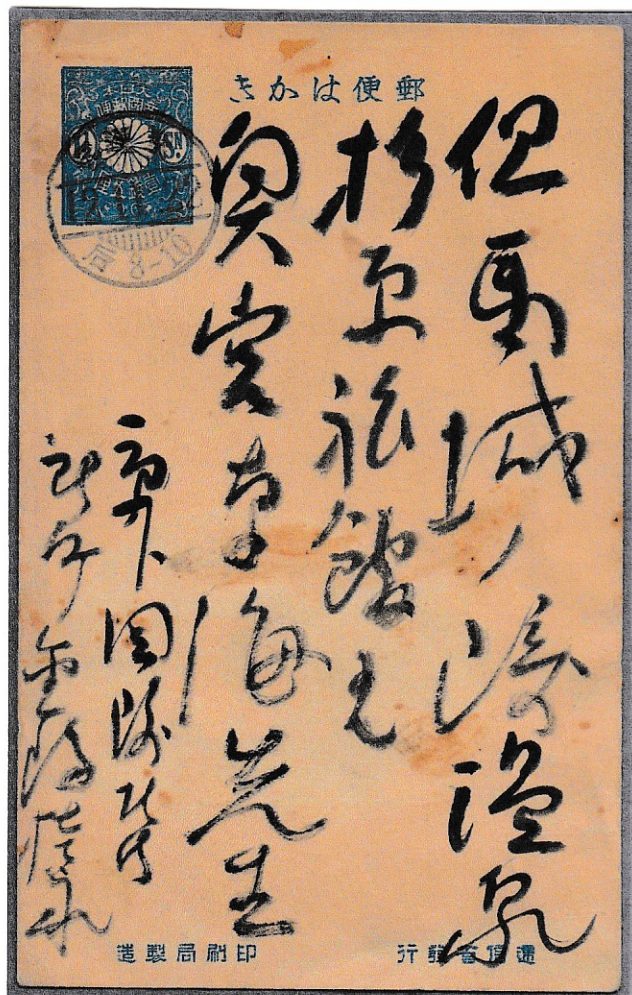


牡丹(部分) (1948年)

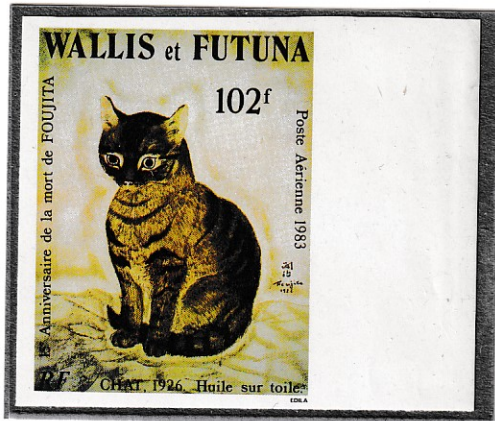
この葉書は大正12年に城崎温泉に滞在していた恩師に宛てた直筆の絵手紙実通便。

大正12年(1923年)11月22日 京都・聖護院 → 但馬・城崎温泉

宛名面 (縮小率90%)



# 藤田嗣治 (1886~1968)



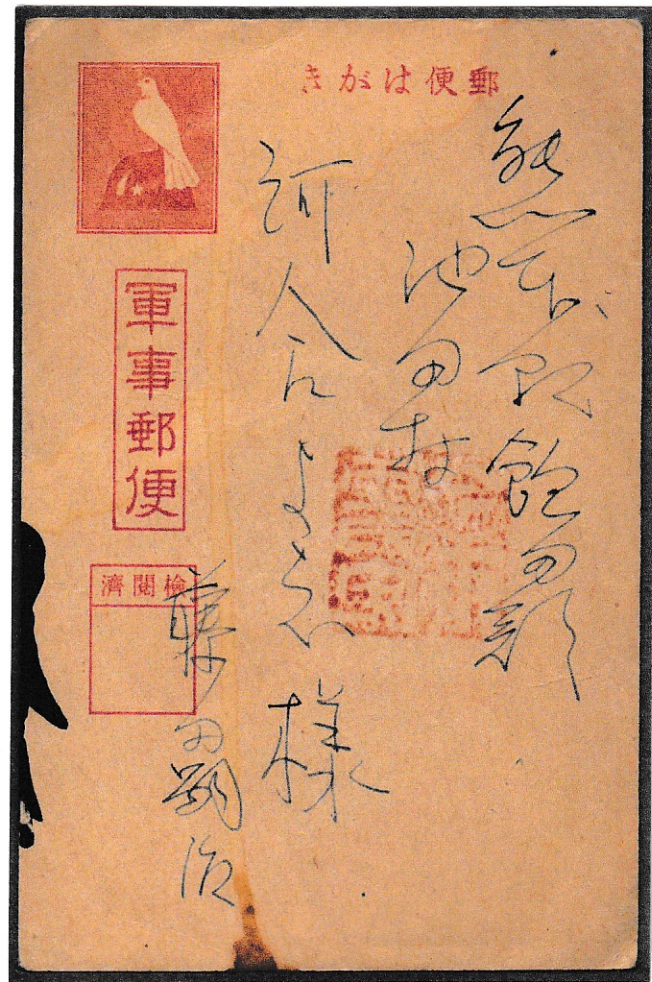
猫(1926年)

仏領ワリスツナ1983年発行 逝去15年記念

明治19年、東京市牛込区に陸軍軍医の四男として生まれ、東京美術学校西洋画科に学んだ。しかし、印象派の流れをくむ黒田清輝ら教授陣に嗣治のクラシックな画風は評価されず、卒業後、パリのモンパルナスに移住。モディリアーニやピカソとの交遊も深く、日本画の技法を取り入れて描いた猫や女性の油彩画は1920年代、エコール・パリの隆盛期だったフランスで大好評を博し、時代の寵児となった。1933年に帰国したが、従軍画家を委嘱されて1938年から中華民国へ渡り、第二次大戦中も陸軍美術協会理事長として「アッツ島玉砕」などの戦争画を描いた。敗戦後は戦争に協力したことを批判されて再度パリへ移住し、生涯帰国することはなかった。1955年にフランス国籍を取得。翌年、フランス政府からレジオンド・ヌール勲章を贈られ、カリックの洗礼を受けて、レオナルド・ジタとなった。1968年に病没し、遺体はパリ郊外ランスの礼拝堂に眠る。

この葉書は従軍画家として戦地に赴いた際、飯盒炊飯の様子を水彩でスケッチした軍事郵便。検閲印が漏れており、詳細は不明。

昭和13年(1938年)～昭和14年(1939年)頃 戦地→日本・熊本県



宛名面 (縮小率90%)



フール河岸(1950年)  
フランス2018年発行 美術切手

# 中村岳陵 (1890~1969)



気球揚る(1950年)

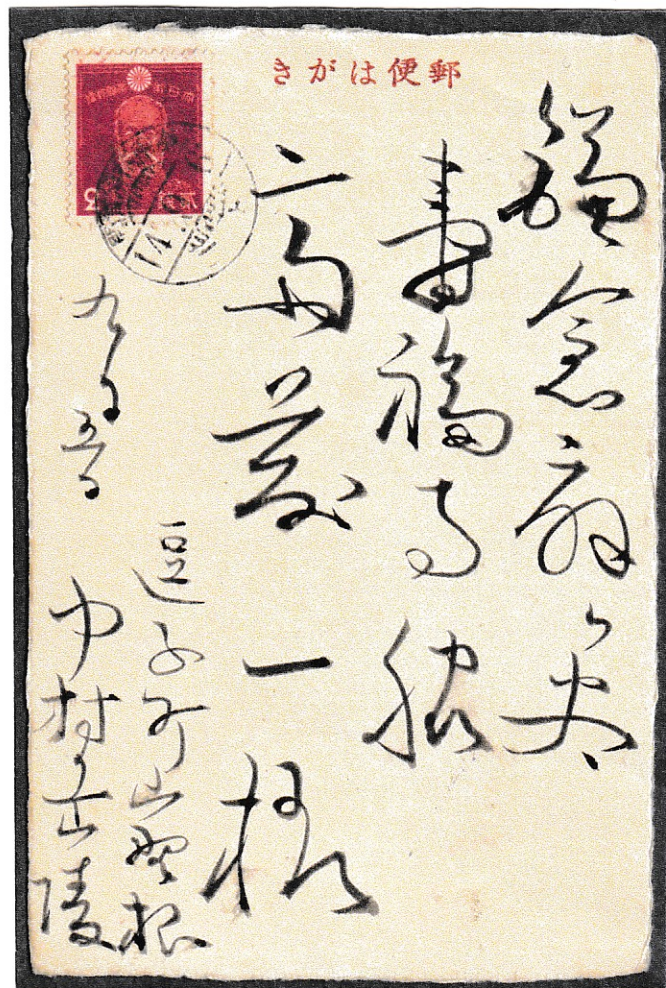


明治23年、静岡県下田の農家の末弟に生まれた。上京して13才より野沢堤雨に琳派を、河辺御楯に土佐派を学んだ。伝統的な大和絵の技術を習得して、東京美術学校日本画科に進み、結城素明に師事。首席で卒業した大正元年、文展に初入選。同3年に速水御舟らと赤曜会の結成に参加。再興第1回院展に入選し、翌年25才にして同人に推挙され、長く院展で活躍した。昭和3年、日本美術学校教授、同6年、多摩美術学校教授を歴任。戦後は日展で活躍し、昭和37年に文化勲章を受章した。大和絵や琳派研究に加えて、写実を重視し、燈明かつ華麗な色彩を生かした画風で知られた。

昭和47年、切手趣味週間の図案に採用された「気球揚る」は戦後まもなく日展に初出品した岳陵の代表作。洋風と和風、新と古を対比させ、明治の世相を描いた風俗画の傑作と言われる。

この葉書は親交のあった、もと朝日新聞支局長宛てに送った絵手紙の実郵便。来訪された時不在だったことのお詫びと送られた写真の御礼などが季節の茄子の挿絵を添えて書かれている。

昭和14年(1939年)9月6日 逗子一鎌倉

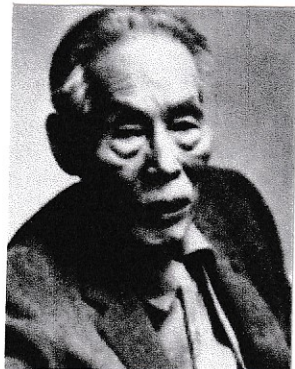


宛名面 (縮小率90%)



窓辺 (1953年)

# 川端龍子 (1885~1966)



明治16年、和歌山市生まれ。11才の頃、家族で上京。中学を中退し、白馬会洋画研究所、太平洋画会研究所で洋画を学んだ。国民新聞社に勤務し、挿絵を描いて名を知られるようになったが、米国旅行中にボストン美術館で見た平家物語絵巻に感銘し、日本画に転向した。大正4年と5年の院展で入選し、同6年の同人に推されたが辞退。大型作品を展示する「大作主義」を標榜して「会場芸術」と呼ばれた。大画面の豪放な屏風絵を得意とし、大正~昭和戦前期の画壇において異色の存在を示した。昭和10年帝国美術院会員、同12年帝国芸術院会員に推されたが辞退。野にあって画業に専念した。昭和34年文化勲章受章。俳句にも親しみ、「ホトギス」同人としても活躍した。



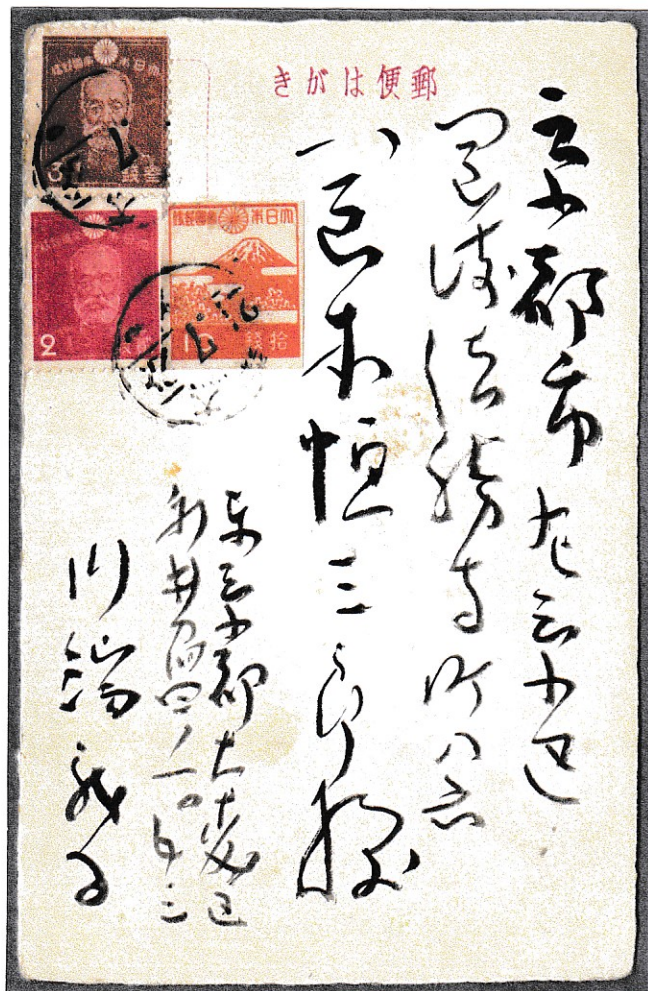
愛染 (1934年)

戦争間近かの暗い時代に鮮やかな色彩でつがいのおしどりを描いた二曲一隻の屏風

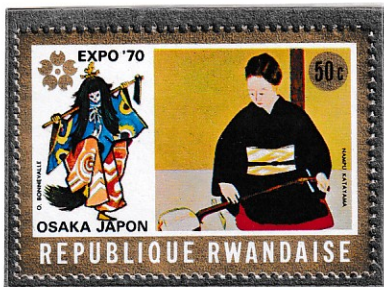
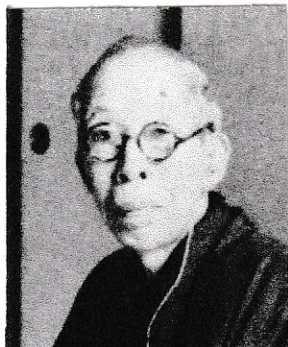
この葉書は親交のあった染織研究家の岡本恒三郎宛ての直筆絵手紙実通便。夏らしい糸瓜の花を中央に大きく描き、達筆の文章と相まって川端龍子らしい日本画の世界を感じさせる。

昭和21年(1946年)7月28日 東京都大森区 → 京都市左京区

宛名面 (縮小率90%)



# 塀山南風 (1887~1980)

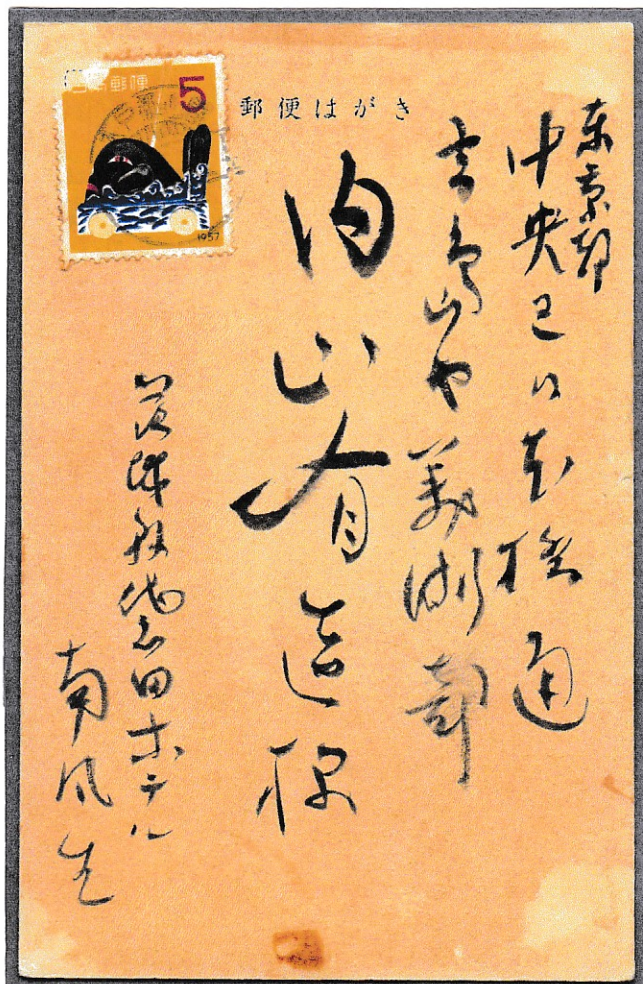


知秋 (1962年)  
ルアンダ1970年発行 大阪万博記念

明治20年、熊本市生まれ。本名は熊次。幼少時に父母を亡くし、生家も破産する中で小学生の頃から図画に秀でていたため、地元画家福島峰雲に師事して日本画を学んだ。22歳で上京し、高橋広湖門下となって文展などに出品。大正2年出品の「霜月頃」は色彩美を重んずる新感覚的画風が横山大観に激賞されて初入選。翌年より大観に師事し、日本美術院再興後は院展に出品を継続した。その後も日本美術院常務理事や日展参事などを歴任し、日本画の発展に寄与した。花鳥画、特に鯉を中心とする魚類を描いたことで知られるが、戦後は純粹素朴な人柄そのままに、明るい色彩と大らかな画風で横山大観や武者小路実篤など多くの肖像画を描いたことでも有名である。昭和43年に文化勲章を受章し、翌年には熊本市名誉市民となった。

この葉書は昭和32年1月、茨城県の袋田温泉ホテルに滞在した際に東京の高島屋美術部関係者に宛てて差し立てた絵手紙の実通便。雪見の温泉を自ら楽しむ様が軽妙な水彩画で描かれている。

昭和32年(1957年)1月14日 水戸-郡山間鉄道郵便 → 東京都中央



宛名面 (縮小率90%)



画室にて (1987年)

# 棟方志功 (1903~1975)



明治36年、青森市の刀鍛冶職人の三男に生まれ、19才で上京。洋画を独学し帝展等に油絵を出品するも落選し、美術教師をしながら平塚運一に学んで木版画を創作した。昭和11年、国画展に出品した「大和し美し」が出世作となり、これを機に柳宗悦、河井寛次郎ら民芸運動の人々とも交流し、大きな影響を受けた。昭和20年に戦時疎開した富山県西礪波郡福光町で浄土真宗の仏教世界に触れると共にこの地の自然を愛して、自宅アトリエを建立。無私に心に咲く無名の美を根本に、人間本来の素朴な情念や広大な宇宙観を版画で表現した。昭和31年のベネチア・ビエンナーレ出品作は日本人として初の国際版画大賞を受賞。昭和45年に文化勲章を受章。



鐘溪頌唐衣の柵(1945年)

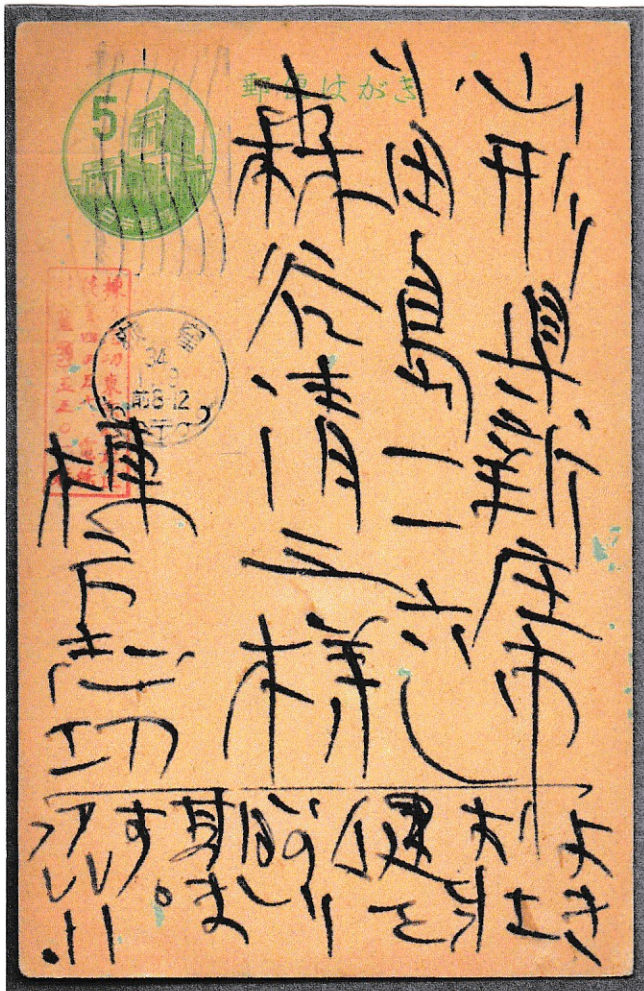


弁財天妃の柵  
(1974年)

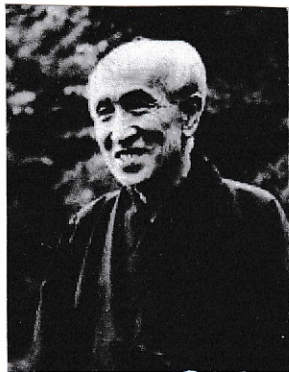
この葉書は昭和34年元旦に、作家の森谷清三に宛てて差し出され手刷り版画の年賀状実郵便。棟方志功は毎年、新年に相応しい柄の版画を彫刻、手刷りして送っていた。

昭和34年(1959年)1月1日 東京・荻窪 → 山形・新庄

宛名面 (縮小率90%)



# 前田青邨 (1885~1977)



明治18年、岐阜県中津川村で乾物商の長男として誕生した。本名廉造。16歳で上京し、尾崎紅葉の勧めで梶田半古に入門し、「青邨」の雅号を貰う。明治40年、22歳で紅児会に入り、小林古徑や安田靫彦らと日本画を研究。大和絵の伝統を深く学び、歴史画を軸に肖像画や花鳥画を幅広く描いた。昭和5年に「洞窟の頼朝」で第1回朝日文化賞を受賞。この作品は武者絵における鎧兜の精密な描写は高く評され、後に重要文化財に指定された。昭和10年に帝国美術院会員となり、同26年には東京芸術大学日本画科の主任教授に就任。晩年には法隆寺金堂壁画の再現や高松塚古墳壁画の模写等の文化財保護事業に尽くした。日本画壇・院展を代表する画家として活躍を続けて、昭和30年には文化勲章を受章した。



洞窟の頼朝 (1929年)



腑分け

(1970年)

この葉書は親交のあった考古学者で、榎原考古学研究所の初代所長だった末永雅雄宛ての手描き絵手紙礼状実郵便。

昭和45年(1970年)3月8日 神奈川県大船 → 大阪府狭山

宛名面 (縮小率90%)

